

[要旨]

世俗の時代の「護教論」 ——チャールズ・テイラーの神学的な歴史——

坪光 生雄

チャールズ・テイラーの大著『世俗の時代』の議論は、しばしばカトリックの信仰を持つ著者自身の宗教的立場性との関係の中で読解される。実際、同書が世俗性に関して描き出した社会的想像の歴史物語が純粹に記述的な性格のものでなく、むしろ神学的規範性によって深く方向づけられたものであることは確かであろう。先行研究のうちにはここからさらに進んで、テイラーの企図したものを「護教論」と要約するものもある。この要約はしかし、そこで「護教論」という語で理解されているものが反世俗的な批判性と理解される限りにおいて誤りを含むだろう。テイラーは今日の世俗性を、自らを含む同時代人を規定する「信仰の条件」として分析するが、それがまさに「条件」、つまり「われわれがその中で自分自身の信仰を発展させるところの感覚された文脈」である以上は、彼のカトリシズムそれ自体もまた世俗性という時代的条件下に作動するのであって、その外部からの批判を基礎づけるものではない。

本稿はテイラーの神学的規範性をより明確にするため、護教論的な読解を支える根拠ともなっている彼の二つの論点について検討した。排他的人間主義への批判と、イヴァン・イリイチの思想への接近がそれである。前者は多くの先行研究によって世俗性一般への批判と混同されがちだが、それらは当の批判の内在的論理からして注意深く区別されるべきである。また、『世俗の時代』におけるイリイチへの肯定的な言及は、テイラーが世俗性をキリスト教の「墮落」の帰結として否定的に捉えているとの解釈を導くが、彼の神学はイリイチのような終末論的性格を持たないため、その歴史もイリイチの「墮落」と同一ではない。以上の議論を経て本稿は最終的に、テイラーの神学的目標を立場の異なる他者との会話、友情、相互理解に特徴づけられる「聖徒の交わり」、あるいは「差異を横断する一致」として確認した。